【原　　著】

「心のコミュニケーション」に関する道徳性の考察
―教員養成課程におけるプレゼンテーションソフト活用会話形態が大学生に及ぼす道徳性の効果―

坂本　清美　作田　澄泰　中山　芳一

Consideration of morality concerning "communication of the heart"
-Effects of Presentation Software in Teacher Training Course Effects of Morality on Conversation Students' Conversation Form -

Kiyomi SAKAMOTO，Kiyohiro SAKUDA，Yoshikazu NAKAYAMA

2019
岡山大学教師教育開発センター紀要　第9号　別冊

Reprinted from Bulletin of Center for Teacher Education
and Development, Okayama University, Vol.9, March 2019

岡山大学教師教育開発センター紀要，第９号（2019），pp.85－98

【研究論文】

原　著

「心のコミュニケーション」に関する道徳性の考察

－教員養成課程におけるプレゼンテーションソフト活用会話形態が大学生に及ぼす道徳性の効果－

坂本　清美※１　作田　澄泰※２　中山　芳一※３

今日の教員への課題を取り上げ、意思疎通のあるコミュニケーションを導入した教員養成課程の必要性を検討した。なお、大学3年生(男性：10名、女性：15名)を対象として4種類の会話形態を行い、最も意思の疎通を感じ取ることのできるコミュニケーションが推認された。さらに、教職を目指す大学生を対象にして、プレゼンテーションソフトを活用した異コミュニケーションを行い、将来自分たちのえがいている教師像を目標として実施することにより、教員を志としての道徳観を抱くことが明確化された。そして、本研究における結果からこの会話形態により、道徳教育をはじめとする授業等を含めた学校教育活動全体に関わり、意思疎通による道徳性を高める効果が予測された。また、これからの倫理観と道徳観を培うための教員養成課程の在り方について明らかとした。

キーワード：目指す教師像，コミュニケーション，道徳性を深める会話形態，意思の疎通，
倫理観と道徳観

※１　元岡山大学大学院教育学研究科技術補佐員
※２　早稲田大学教師教育研究所
※３　岡山大学全学教育・学生支援機構

Ⅰ　はじめに

近年、教員の退職者の増加や少人数指導、教科担任制等の学校改革により、以前に比べ教員数が大幅に採用されつつある時代となっている。懲戒処分については、文部科学省調査（2009-2010）では7981件（2009)、4303件（2010）[1] と減少傾向にある。しかし、依然として教員に関する不祥事が続いており、モラルと資質の向上に向けた取り組みが必要である。こうした事態を踏まえ、文部科学省（2018）は不祥事の減少と社会への信頼回復、多様な教育現場への対応に向け、大学での教員養成課程、教職員研修等をさらに充実させることとしている。

なお、吉田(2016)によると、『これまでの我が国日本の歴史においても、昭和63年の教育職員免許法改正に先立ち、教員養成制度の改革について審議した教育職員養成審議会は、昭和62年の答申『教員の資質能力の向上方策等について』において、教職の専門性を担保するものとして次のように示している。「学校教育の直接の担い手である教員の活動は、人間の心身の発達に直接関わるものであり、幼児・児童・生徒の人格形成に大きな影響を及ぼすものである。このような専門職としての職責に鑑み、教員については、教育者としての使命感、人間の成長･発達についての理解、広く豊かな教養、そしてこれらを基盤とした実践的指導力が必要である。これらは学校教育活動における特性として、人間の成長・発達についての理解、広く豊かな教養、そしてこれらを基盤とした実践的指導力を条件としているものである。さら

に人間の心身の発達、人格形成に直接的に関与する立場にあることに由来する責任感を職務に要求するものである。」[2)]と述べ、教師は今後の子どもたちにとって影響を及ぼす、崇高な職務であることが伺える。

筆者(作田)は、これまでの課題と先行研究をふまえ、学校教育の要となる教員養成に向け、以下の教師像を示唆する。

＜目指す教師像＞
① 教育専門職としての質の高い人間力と道徳観をもった教師
② 教育専門職としての授業工夫改善、研究性に富んだ教師
③ 十分に児童生徒理解等のできる人間力のある教師
④ 保護者・地域と密な連携（社会貢献を含む）をとり、願いに寄り添うことにより、信頼を得ることのできる教師
⑤ 職務に専念し、児童生徒に弛まない愛情をもち、誠の心をもちつつ忍耐強く、教育に取り組むことができる教師
⑥ 社会への変化に対応できる教師

以上の教師像を目標にし、児童生徒・保護者・地域から信頼を得ることのできる教師像が求められる。こうした、教員の質に関する課題点を克服するためには、質の高い教員養成機関において、厳しい教職課程を終え、教員免許を取得することにある。そのためにも、教員養成機関である大学において、教職課程の講義カリキュラム及び、講義内容の改善を図る必要があると指摘する。

講義内容においては、以上の「目指す教師像」を培うためには、教育現場にて必要不可欠である授業、児童生徒との関わり、保護者対応、地域との関わり等を踏まえ、より高いコミュニケーション能力を必要とする。さらに、近代化に伴いコミュニケーション不足が叫ばれる今日、学校教育の重要な役割を担う教員養成課程の内容を検討する必要がある。なお、教員養成課程において、コミュニケーションを活用した高い倫理観と道徳観に根差した内容の必要性を指摘する。また、こうしたコミュニケーションの充実については、大学生が授業実践を行うにあたり、必要不可欠となることは言うまでもない。

Ⅱ　研究の目的

近年では、コミュニケーション不足が叫ばれる中、十分に保護者・地域と連携がとれていないことが多くあり、会話がほとんど行われていないために生じる教師への不信感が多く叫ばれている。コミュニケーションは児童生徒理解、教科授業指導等の学校教育活動全体を通じて行っていく上で、あらゆる場において必要不可欠となり、教員養成課程が設置されている大学において重要な課題となる。中央教育審議会答申「今後の教員養成・免許制度の在り方について」(文部科学省2006)は、「教師の質の向上」の方針の一つとして、中央教育審議会答申（文部科学省2005)と同様に「総合的な人間力」を挙げ、「対人関係能力、コミュニケーション能力などの人格的資質」を求めた。これに対し、渡邉(2006)は、このようにコミュニケーション能力が教師の人間的な資質能力とされた背景として、学習を「扶ける」教育観への転

換があるとし、教師のコミュニケーションは、学習者との人間関係を築き学習意欲を喚起する上で重要であるとした。[3,4] このコミュニケーションについては、現場の教員が学級経営を行っていくにあたり、「学級開き」と言われる年度初めの新しい学級方針について児童生徒・保護者に理解を求めていくために、さらに高い他者への深い理解を求めた「意志の疎通」を図るプレゼンテーション力が必要とされる。しかし、これまでの先行研究を見ても、このような教員養成課程における意思の疎通が図られたコミュニケーションにおける書があまり見られないのである。

また、今日では著しい情報機器の進展による社会を迎え、「人と会話することが苦手である」といった人たちが増え続けている。つまり、こうした今日のコミュニケーション不足の課題を抱える大学生から巣立っていった教育者たちが、学校現場に入ろうとしているのである。そして、教職への強い専門意識をもつどころか、職自体への志も減少しつつある。このような教職への意識改革と質の向上を行っていくためには、教職の良さとやりがい、教職を行っていく上での使命感等を踏まえた教師教育を十分に行っていく必要がある。そのためには、人間味のあふれた教師として、一人の人間としての根本の在り方に照らした倫理観と道徳観ある人間力の育成が求められる。さらには、広い視野と教育に情熱をもち、児童生徒の育成のために教職に専念できる教師像を目的として、真に相手に伝わるコミュニケーション力が必要不可欠となる。

本研究では以上の課題を踏まえ、プレゼンテーションソフトを活用した会話を実施し、どのような会話形態が自他相互に伝わり、教師としての道徳観ある人間力を培うことができるかについて検証考察した。そして、未来に巣立っていく教師たちによる、「高い倫理観と道徳観の育成」「教育職としての専門性に富んだ力量を培っていく意識の改革」を目的として本研究を実施した。以上の点をふまえ、本研究による質の高い教員養成を目的とする。

Ⅲ　研究方法

筆者はⅡの課題を踏まえ、教員免許取得希望者を対象として大学での講義を行った。まず、プレゼンテーションソフトを活用してスライドを作成し、作成したスライドを用い、4種類のコミュニケーションを行った。そして、実施した会話形態の中から、教師にとってどのような会話と力量が必要であるかについてアンケートを実施し、結果をもとに検証した。アンケートについては、実施大学の承諾をとり、大学生自身にコミュニケーション効果検証における同意を得て実施した。本大学は、岡山県北部に位置する山間にあり、全国的に見ても都市部から外れた長閑な環境にあり、学習条件には合っているが、人口約32,000（2016年統計）と他の都市部とは異なり、多くの人との関わりが少ない。そのため、筆者の居住する近隣において、コミュニケーション不足が考えられる山間の地域の大学を取り上げた。対象者については、教育実習を目前に控えた大学3年生の会話を分析し、今後教職に就くにあたり、授業及び、学級担任として重要な役割を担うためのコミュニケーション方法について検討した。そして、目指す教師像への自己意識の深まりについて分析,考察した。研究方法（講義内容）については、以下に示す通りである。

対象：岡山県内大学3年生 教職課程 教員免許取得希望者、男性10名、女性15名
＜希望教員免許取得人数＞
幼稚園：12名、小学校：7名、中・高等学校（保健体育）：5名、
高等学校：1名
教職実践演習15時限（90分/時限）のうち、2時限分を集中講義として行った。実施時期は2014年6月に実施した。なお､本研究（個人情報等の取り扱い）に関わっては、該当大学による承諾を経て行っている。
＜講義内容＞
① 教師を目指す意義等の講話を聞く。
・教師としての意義等について、学級経営などの具体的な話をする。
② パワーポイントの説明を聞く。
・実際に過去の作成したスライド例(本講義とは異なる課題のもの)を見せながら、文字の大きさ、形、色、アニメーション等の効果について具体的に説明する。
③ 自分自身の目指す教師像をえがいてワークシートに記入する。
・各自目標とする希望校種を想定し、将来自分が教師となる時を想像して記入する。
④「私の目指す教師像」をテーマに、各自の目指す教師の姿を5 ～ 7枚程度でスライドにまとめる。
・自分が教壇に立ち、学級経営、授業をしているところを想像しながら作成する。
⑤ 作成したスライドをもとに、隣人と1対1で会話する。
＜4種類の会話形態＞
(1)無言で動作も行わず、スライドを活用しての会話
(2)無言で動作(表情を含む)のみを行い、スライドを活用しての会話
(3)言語のみとスライドを活用しての会話
(4)言語、その他(動作を含む)を行い、スライドを活用しての会話
⑥ ⑤で実施した会話形態についてワークシートへ記入する。
(1)最も評価する会話形態とその理由
(2)コミュニケーションで最も大事なこと
(3)教師にとって大切なこと
対象の取得希望教員免許校種については、本学における異取得希望教員免許同士が会話することにより､教員養成課程における多面的な視点（価値観）におけるコミュニケーションを試みた。また、合計25名という少人数で実施することにより、他者への意思の疎通を図る上で伝わりやすくなることと考えた。

Ⅳ　結果と考察

1　コミュニケーションによる意思の疎通への効果

プレゼンテーションソフトを使い、「私の目指す教師像」をテーマにしたスライドを用い、Ⅲの講義内容⑤に示す(1) ～ (4)の会話形態のもと隣の者と会話した。その結果、最も評価する会話形態及び、理由として次に示す回答が得られた。（一部抜粋）表１のように、どの校種においても、(4)を選んだ人数が最も多い水準となっており、

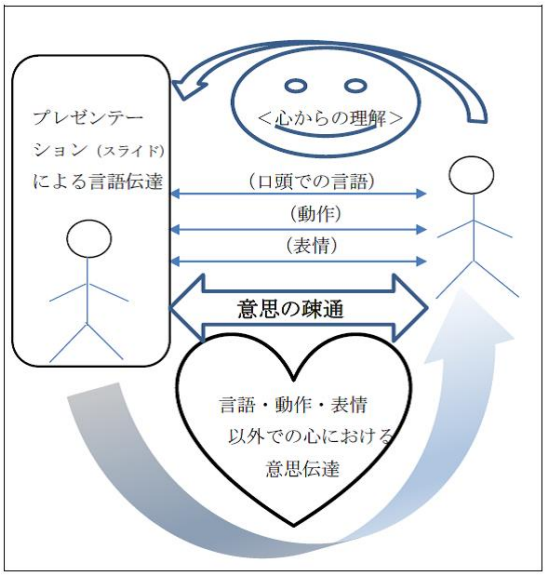
表１

＜幼稚園教諭＞ (4)と答えた人数：10 人 ・言語で伝えることができるのはもちろん、動作を加えて伝えることができたし、心情も入れることができたため。 ・自然に身振り手振りが加わるので、特に伝えたいことや強調したい部分が強く伝わってきたから。 ・動作や表情があるので、自分が発表しているときに聞いてくれる相手がどんなことを思っているのかが分かるから。 ・相手が途中でうなずいてくれて、しっかり聞いてくれているという安心感があったから。 ・スライドだけで伝わりきらないことも、話を聞いて相手がどういう表情をして分かったのか、分かっていないのかがはっきりするから。 ・言語がないとスライドだけでは分かりにくい。動作、表情があると相手の気持ちや考え、思いがより明確に伝わるし、ただ聞くより集中できる。「どうして」「なぜ」といったことも話せ、双方の理解が深まる。	＜小学校教諭＞ (4)と答えた人数：5 人 ・スライドでは分からない、もっと詳しいところまで知ることができるから。また、表情と言葉があることによって感情がより伝わってきた。 ・具体的に、理想の教師になるためにすることで、何故、それをしようと思ったかを聞くことができた。 ・動作や表情があると話に引き込まれやすく、人の本当の気持ちが分かる。 ・発表する方も見る方も楽しくなり、いい雰囲気ができる。 ・身振り手振りで注目したり、表情で相互の心情に伝えたりすることができる。 (3)と答えた人数：1 人 ・動作をせずに言葉だけでスライドに書かれていることをより深く教えようと思うと色々なことを言わなければならないから。
(3)と答えた人数：2 人 ・無言というのは、相手に自分の思いが伝わっていないから、言語を用いてやったほうが相手に自分の思いが伝わると思う。動作も用いてやるのもいいと思うけど、自分には(3)が合っていると思う。	(2)と答えた人数：1 人 ・話せないため難しいけれど、聞く方も伝える方もお互いが聞こうとし、伝えようとする思いがあれば、心と心で会話できると思った。また、実際に話すことができなかったり、耳が聞こえなかったりする方もいるので、会話する時、表情や動作で分かりやすく伝えれるようにしたいと思った。
＜中・高等学校（保健体育）教諭＞ (4)と答えた人数：3 人 ・動作や言語をつけることによって、自分の思いがさらに表現でき、相手にも気持ちが伝わると思うし、興味をさらにもってもらえるのではないかと思ったため。 ・無言よりも言語があったほうがよい。喋るだけでも伝わるけど、スライドを指し示すなどの動作が少しでも加わるだけで注目度が変わった気がしたから。	＜高等学校（公民）教諭＞ (4)を選んだ人数：1 人 ・(1)(2)の時はスライドに書かれたことしか分からなかった。(3)の時と(4)の時はスライドに書かれたことだけでなく、書ききれなかったことや補足を交えて伝えることができた。相手の発表の時も質問したり、相手の考えも聞いたりすることができた。相手に伝える時は、身振り手振りを使った方が伝えやすいと思ったから(4)を選んだ。
(3)と答えた人数：1 人 ・(4)の場合、少人数であれば、質問しながら理解度の有無を確認しながら会話できるが、大人数の場合、(3)の方が効率よく進め、相手に理解してもらえると思うから。	
(2)と答えた人数：1 人 ・話をする上で、表情が大切で無言ということを指定されている中で、どのように相手に情報を伝えるか、気配り等も重要になってくるから。また、もし、同じ言葉を話した時に、暗い表情で言うのか、明るい表情で言うのかでは、相手のとり方も変わってくるから。	

言語のみでは相手に伝わりにくく、感じ取りにくい点が伺える。小学校教諭(2)の選択理由のように、(2)の会話形態を選択してはいるものの、言語・動作以外のスライドを活用した心と心の繋がりについて示唆している。これは、ただ単なるスライド表示、言葉、動作のみではなく、本来コミュニケーションのもっている「伝えようとする行為」によるものと思われる。回答では、(4)以外を選んだ人もいるが、理由を見ると、内容的には(4)を選んだ人の内容とよく似ている。4種類の会話を段階的にスライドに加え、言語・動作を取り入れることで、ただ単に口から発する言語のみで話すことよりも、動作、或いはそれ以外の言語伝達から、より一層の自分の思いが伝わっていくものと思われる。そして、図１に示したように、口頭における言語、動作、表情等が大きなきっかけとなり、自分の思いが伝わることとなる。つまり、この理由としては、表面上では感じ取ることのできない、心の奥底にある潜在的な部分が相手に伝わることにより、意思の疎通が図られるものと思われる。

表１の幼稚園教諭、小学校教諭、中・高等学校教諭、高等学校教諭に示されているように、少しのうなづきや表情によっても、相手の感じ方は変わってくる。そして、こうした総合的なコミュニケーションの取り方によって、その場の雰囲気が大きく変わる。つまり、自分たちが伝えようとすることをあらゆる手法を使って、相手にどのように伝えていくかによって、雰囲気が大きく変化してくるのである。このように、その場の雰囲気によっては、相手の会話に対し、聞こうとする態度や理解度

図１　意思伝達を深めるコミュニケーションモデル



も変わり、説明する側にとっても心地よい雰囲気を感じ取れることとなる。そうすれば、互いに人間関係に信頼度が増し、より一層に「聞こう」とする意欲がわいてくるものと思われる。以上の意思疎通に関するコミュニケーションは、将来的に教職に就き、教壇に立った時も同様に、学級の雰囲気づくりによって、口頭の言語や動作、表情以外による「心で伝えること」についての重要性を示すものと考えられる。

２　心のコミュニケーション

例えば、人との会話を行うとき、口頭での言語が困難となる場合がある。しかし、話し手が全力で相手に伝えようとすれば、相手の気持ちも感じ取れることになる。筆者(作田)がかつて教職経験の中で、言語、動作、表現することも困難な人を目のあたりにしたことがある。こちらから言葉を発し、いくら伝えようとしても怒り出したり、動こうとはしなくなったりすることが多々あった。しかし、相手が今何を求め、要求に答え、真摯に関わっていくかによって、数ヶ月後には、笑顔を見せて動くようになった。これは、普段から日常的に使われている口頭での言語や動作以外における言わば、「心で伝え合う」意思の疎通が行われるようになった結果であると考える。また、「アー、アー」「アッ」「ウー、ウー」などの口から発する少しの言語についても、彼らは自分の思いを全力で伝えようとしている。この言葉を心から理解しようとすれば、必ず相手も理解しようとするようになる。こうしたコミュニケーションの積み重ねが、正の効果をもたらし、豊かな人間関係が構築されていくこととなる。このようなコミュニケーションづくりを行うためには、まずは相手（聞き手）の立場になり、「どのようにしたら理解してもらえるのか」という視点から会話することが重要である。話し手が一方的に「聞きなさい」というのでは、聞き入れることは困難となってくる。相手の心に耳を傾け、心の声を聞こうとすることで、相手が今何を求め、何を伝えたいのかが感じ取れるようになる。これは、ただ単なる机上の空論ではなく、実際に人と接し、真摯に関わるということに尽きるであろう。なお、相手がどのように関わるかによって、人の心が大きく動かされていくことは教育界のみならず、全ての領域においても同様のことが言えよう。学級児童生徒にとっても、自分の思っていることがうまく話せない場合が多々ある。しかし、表面的な部分以外での奥底にある心をつかみ、理解することにより、授業、学級経営も向上していく。そして、こうしたコミュニケーションが時間をかけて培われれば大きな絆となり、教師にとっても児童生徒にとっても人生の心の大きな支えとなる。

これは、人間が共に生きているものとして感じる共通の部分であり、この心が損なわれてしまうと全てが成立しなくなる。ゆえに、教師が実践する学校教育活動全体に対し、より一層の質の高い意志疎通のとれたコミュニケーションのあり方を必要とする。

3　プレゼンテーションコミュニケーションによる道徳性の効果

本講義を行う以前の意識調査として、目指す教師像についてアンケート調査を行った結果、以下の回答が得られ、志望校種別に示した。(一部抜粋)

表２

＜幼稚園教諭＞ ・子どもの気持ちに寄り添える先生 ・子どもに優しい先生 ・子どもからも保護者からも信頼、尊敬される教師 ・どんな子どもに対しても同じように接することのできる教師 ・優しくて時には厳しく、子どものお手本となれるような先生 ・自分から積極的な行動ができる ・いつも笑顔で接することができる	**＜小学校教諭＞** ・児童、保護者から信頼される教師 ・情熱や使命感をもち、皆から信頼される教師 ・明るく、児童から好かれる教師 ・毎日を子どもと一緒に楽しく過ごすことができる教師 ・児童に全力で向き合い、信頼される教師 ・学習を楽しいと思えるようにできる教師 ・児童自ら、自分の意見を述べられるようにできる教師
＜中・高等学校教諭（保健体育）＞ ・部活の監督として、全国大会に出場できる。 ・生涯、スポーツをしてもらえるよう授業を伝えることのできる教師 ・運動が苦手な生徒に少しでも好きになってもらえるように指導できる教師 ・元気で明るく、生徒からしたわれる教師 ・生徒から尊敬され、頼られる教師	**＜高等学校教諭（公民）＞** ・叱るべきところは、叱ることができる先生

表２を全体的にみると、「信頼される」「尊敬される」「模範になる」「気持ちに寄り添える」といったカテゴリーが多くあり、教師としての理想像が前面に表れていた。教師の理想としての視点は伺われたものの、具体的な視点としての方向性はみられなかった。

次にプレゼンテーションソフトを活用したコミュニケーション後、「教師にとって大切なことをキーワードで3つ答えましょう」という質問に対し、次の回答が得られ、校種ごとにまとめた。(一部抜粋) キーワード後の数は記述数を示す。

表３

＜幼稚園教諭＞ ・信頼関係⑤　・コミュニケーション能力⑤ ・礼儀正しく笑顔でいる④　・子どもと向き合う熱意③ ・努力③　・児童生徒理解③ ・挑戦②　・観察力②　・責任感②　・能力、技術② ・誰からも尊敬される人間② ・他者の模範となる言動を心がける① ・積極性①　・工夫・豊富な知識①	**＜小学校教諭＞** ・信頼関係⑥ ・努力②　・コミュニケーション能力② ・関わり①　・積極性①　・知識①　・一生懸命さ① ・元気①　・思いやり①　・児童生徒理解① ・理想を追い続ける力①　・豊富な知識①
＜中・高等学校教諭（保健体育）＞ ・児童生徒理解② ・コミュニケーション能力①　・笑顔① ・分かりやすく楽しい授業① ・社会のルール、マナー・礼儀をしっかりと教えることのできる教師① ・優しさ①　・厳しさ①　・情熱①　・気合① ・尊敬①　・行動、態度で示す①　・愛情をもつ①	**＜高等学校教諭（公民）＞** ・尊敬①　・努力①　・信頼①

なお、分類した道徳的価値については、小学校学習指導要領(平成27年度改正)に示されている「1. 主として自分自身に関すること。2. 主として他の人とのかかわりに関すること。3.　主として集団や社会との関わりに関すること。4.　主として生命や自然、崇高なものとの関わりに関すること。」[5)]に基づき分類している。また、道徳教育の根本ともいえるコールバーグ(1927)による道徳性発達理論を参照にしており、この理論を視野に入れた道徳的発達を検討している。本理論によると、「1. 慣習以前のレベル第一段階＝罰と服従への志向、第二段階＝道具主義的相対主義への志向、2. 慣習的レベル

第三段階＝対人的同調あるいは「よい子」への志向、第四段階＝「法と秩序」の維持への志向、3.脱慣習的レベル第五段階＝社会契約的遵法への志向、第六段階＝普遍的な倫理的原理への志向」[6]と提唱されていることから、より高い水準を目指した道徳的価値を培うことにより、道徳性の高い人間育成に繋がるものと思われる。

表２と表３を比較すると、幼稚園教諭では、会話前の表２では全般的にみて、「子どもに優しい先生」「子どもの気持ちに寄り添える先生」などの意見が多く、あくまでも理想の教師像の記述がほとんどである。しかし、会話後の表３をみると、一番多かったのが、「信頼関係」「コミュニケーション能力」、次いで「礼儀正しく笑顔でいる」「努力」「児童生徒理解」「責任感」「挑戦」「観察力」「誰からも尊敬される人間」「能力、技術」とあり、表２と比べると、会話前と会話後では、目指す教師像に対し、具体的かつ明確に道徳的価値が芽生えていることが分かる。

小学校教諭では、会話前の表２の場合、圧倒的に信頼関係の記述が多くみられたが、会話後の表３では、最多の「信頼関係」に次いで「努力」「コミュニケーション能力」、その他の意見として、「積極性」「関わり」「一生懸命さ」「思いやり」「児童生徒理解」「理想を追い続ける力」といった単なる理想としての教師像ではなく、実際に自分たちが教師になったことを想定した道徳的価値のある志向が伺える。中・高等学校教諭（保健体育）では、会話前の表２の場合、具体的に教師になった姿がえがかれており、「信頼」のキーワードが多く示されていた。しかし、会話後の表３では、「児童生徒理解」の他、「社会のルール」「マナー・礼儀」「優しさ」「厳しさ」「情熱」「尊敬」「愛情」などといった道徳的価値要素がコミュニケーションによって培われている。高等学校教諭（公民）においても、表２と表３を比べると、会話前と会話後とでは、「尊敬」「努力」「信頼」といった道徳的価値要素が表れている。

全体を通じて「コミュニケーション能力」「児童生徒理解」のキーワードが多く記述されていた。これは、会話することにより、表面的な言葉のやり取りのみではなく、真に相手の心をつかむことで児童生徒理解に繋がることを意味しているものと思われる。すなわち、口頭における言語、動作、表情以外の心の言語伝達により、相手への思いが理解できることとなる。そして、どの校種にも共通して言えることとして、4種類の会話形態によって目指す教師像への意識の中に、「信頼」「努力」「優しさ」「愛情」「思いやり」その他の数々の道徳的価値が芽生えていることが分かった。しかし、上記のキーワードが出れば、道徳性が育まれたということには繋がらない。人間には様々な要素があり、今後も多面的な角度から検討する必要があるであろう。本検証は、教員養成課程のコミュニケーション行為による一つの結果であり、本会話形態により一定の効果が得られることは明らかとなった。しかし、環境や集団構成により、結果が変容することは十分に想定され得る。今後、多面的な角度による考察が必要であることは言うまでもない。

４　プレゼンテーションソフト活用によるコミュニケーションの利点

本講義では、「私の目指す教師像」をテーマにスライドを作成し、伝えたいことを5～7枚のスライドにまとめた。その結果、コミュニケーション行為において時間等のため、伝えきれない部分をスライドの中に凝縮して取り入れることで、話し手に

よる会話以外の部分の思いを伝えることができていた。しかし、図１に示したように、スライド提示での会話、口頭からの言語、動作、表情のみでは、全てを伝えきることは困難であり、話し手のもつ潜在的な心の部分がどう伝わるかによって、意思の疎通の度合いも大きく変わってくる。プレゼンテーションを活用した会話では予め、自分の伝えたいことが長時間をかけてスライドを作成されているため、伝えたいと思うことが脳裏に蓄積され、会話の中で徐々に言語動作を増やしていったことにより、「伝え合う」という気持ちが培われたものと推認される。なかには話すことが不得意な学生もいたが予め、作成したスライドをもとに会話することで、うまく話せない部分を補うことができ、相手に言動で伝えきれない部分も伝えることができていた。また、スライドには、自分自身の特に伝えたいことが明記されているため、提示された側にも脳裏の中に画像として記憶されやすいものとなる。ゆえに、相手の思いを理解できる度合いも大きくなるという利点が見出されていた。

図２

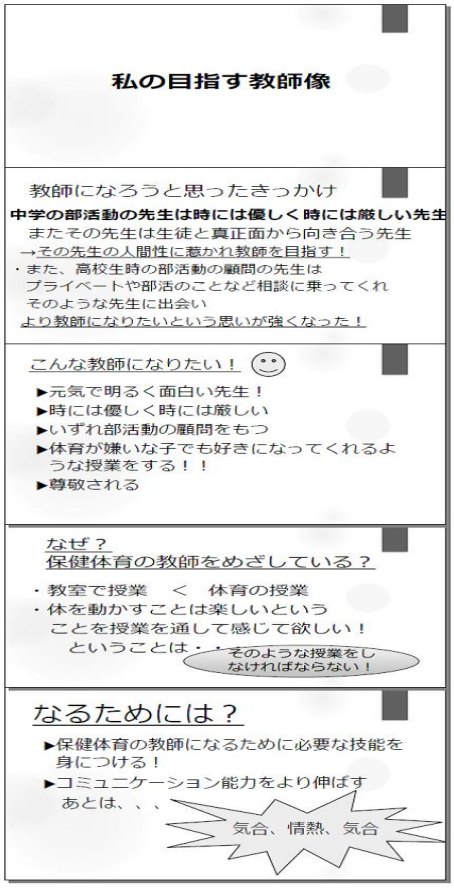


図２のスライドでは、自分が教師を目指そうとした明確な理由が端的にまとめられている。また、教師になった時の抱負についても、「体育が嫌いな子でも好きになってくれる授業をする」「尊敬される」など、具体的に示されたスライドが作成されている。そして、何故、保健体育の教師を目指しているか自問自答し、逆に相手に自分の目指す教師への思いを強く訴えているところが分かる。また、最後のスライドでは、教師としてのコミュニケーションの大切さを伝えている。このスライドについては、将来的に学校現場に立ったとき、学級づくりやキャリア教育において、「自分の将来像」などをもとにした学びの一環として役立てることが期待される。そして、本講義で作成したスライドが次年度の教育実習において役立てることができるよう、保存、改良しておくことを伝え、将来、教師となるにあたり、学級づくりに活用が期待できるスライド作成づくりとなった。

Ⅴ　おわりに

１　学校教育におけるコミュニケーションの必要性

教師として教壇に立つ以上、児童生徒への授業は勿論、数々のコミュニケーションが必要となる。今日でも問題となっている「いじめ」「不登校」その他の問題行動等、保護者対応、地域との連携等、多くの人と関わりなどにおいて、コミュニケーション力が必要とされている。特に教師は、意思の疎通によるコミュニケーションを如

何により善く行えるかによって、学級経営は勿論、全ての授業においても体を成すこととなる。そして、こうしたコミュニケーションが日常からより善く行えることによって、児童生徒、あるいは保護者からの信頼を得ることになるのである。

最後に大学生のアンケートの結果、「コミュニケーションで最も大事な点」について出された意見を下記表４にまとめた。（※ KJ法参照）　回答を見ると、話し手からの一方的な会話だけでなく、相手の視点に立った会話の回答が約半数を占め、本講義での会話形態によるコミュニケーションのあり方に関する受け止め方の変容が伺える。

表４

・言葉のキャッチボールをする。
・相手の目を見て話す。
・お互いがお互いを分かろうとする→相手を敬う心と自分の意見を伝えようとする。
・言葉と一緒に表情で伝える。→言葉の内容以上に相手の受け取り方が変わってくる。
・相手の気持ちを考える。→効果的に動作、表情も加えて自分の気持ちを伝える。
・相手の立場に立ち、相手の思いを読み取る。
・心から伝えたいという気持ち。

なお、Ⅳにおいて考察したように、充実したコミュニケーションを行うためには、言動以外での心のコミュニケーションが必要となる。話し手が一方的に話すのではなく、他者との会話のキャッチボールが成立してはじめて、コミュニケーションも成立するのである。そして、少しの仕草や言動によっても受け止める側によっては、感じ方が違ってくる。すなわち、たとえ口から発せられる言語があったとしても、言語の奥底にある感情や心の部分が伝わらなければ、表面上だけの会話となり、話し手の思いは伝わりきることができない。つまり、心から自分の思いを伝え、理解してもらうことが重要なのである。そのためには、自分の思いだけに留まらず、相手を理解し、思いやる心が必要となる。なお、この点については、表４の結果から、「相手の思い」といったキーワードも出されており、他にも多くの道徳的価値が芽生えてきたことが明らかとなっている。また、本研究において実施したコミュニケーション行為の検証から、道徳性への効果が高まった理由として次の点を示唆する。

① プレゼンテーションソフトを活用したコミュニケーションを行ったこと。
② 言動を行わないなど、段階的に会話を行っていったこと。
③ 限られた時間で会話を行うことで、話すことと受け止める難しさを感じ取ったこと。
④ 自分自身の教師の姿を具体的に想像しながらスライド作成、プレゼンテーションを行ったこと。
⑤ 会話を重ねることにより、相手の意識に立とうとする心が培われていったこと。

こうしたコミュニケーションの充実により、実際に学校教育に携わる上で、周囲との信頼感も生まれてくる。学校教育の中で、教師に求められることとして、「心で受け止めるコミュニケーション」が必要であると共に、他者の思いや背景などを十分に配慮し、他者の立場を踏まえつつ行うことが重要である。つまり、心の意思伝

達が明確に伝われば、必ず相手の心にも響き、相互に意思の疎通が図られることとなる。こうした、質の高いコミュニケーションは、教師の命とも言われる授業、学級経営、地域保護者との連携、職員間等、多岐にわたる人との関わりの中において必要なことと言える。そして、十分にコミュニケーションが行われているか否かによって必ず、人間関係に影響が出てくるものと思われる。

本研究において、教員免許取得希望者の学生を対象にした会話形態の分析により、教職を目指す上で、自分自身の心の中に自己意識がより一層高まる結果が見出された。その過程において、自分自身の今日の姿を深く見つめ直し、より厳しい教職への熱意と思いを抱くことが伺われた。なかには自己省察を行うことで価値葛藤し、自分自身に厳しい見方をしている学生もみられた。

２　これからの教師に求められること

本講義では、プレゼンテーションソフトを活用し、心で伝えるコミュニケーションの大切さが必要であることが明らかとなった。学校現場を目前にする教師にとっては、授業は勿論のこと、あらゆる学校教育活動において、児童生徒、保護者、地域と関わりながら、コミュニケーション行為の必要さをもの語る。特に、児童生徒の心をどれだけ理解し、教え育むことができるのかという点が重要となる。つまり、児童生徒たちと共に学んでいき、如何に相手の目線に立つことができるのかが大事である。そのためには、表面的なものではなく、本心から児童生徒たちの心に入り込み､共に歩んでいくことのできるコミュニケーションとなる必要がある。人に伝え、感じると共に悲しみ喜び、共感できる力をもち、児童生徒の心に寄り添うことが大事である。そして、教師と児童生徒との間に強い信頼感、絆が生まれ､「先生のことが好き」と心から感じるようになることが大切である。こうしたコミュニケーション行為は、児童生徒にとって大変重要であり、教師の実施する授業において、多くのコミュニケーションを取り入れることにより、自ら学び課題を解決していく力、自己実現力、自己決定力を高めていくことに繋がるものと思われる。つまり、教師が児童生徒に教え込んでいくのではなく、自らが学びを習得することが最も重要であると考える。このような学校教育を進めていくことが十分に成されるとき、児童生徒たちの心の中に達成感が生まれることとなる。そして、これから教師となる大学生のみならず、現職の教師たちにとって、如何に子どもたちの心に目を向けた視点をもち、願いに応えることができるかが大切となるであろう。なお、本研究で明らかとなった意思疎通によるコミュニケーションについては、道徳授業をはじめとする、各教科における授業についても重要な視点であり、指導力を高める教師力の向上にも繋がるであろう。

３　成果と課題

以上の点をふまえ、本研究の成果として、大学生自らがコミュニケーションのあり方を模索し、理想の教師像について心から会話することで、互いに目では見ることのできない、心の声を感じ取ることができた者が多数見受けられる結果となった。このことは、今後教師を目指すにあたり、自問自答、葛藤する過程において、信頼・

愛情・努力責任感・工夫・優しさ等の道徳的価値やスライド作成に包括する相互への「尊敬・感謝」という道徳的価値が培われていったこととなる。また、本講義のように4つの会話形態を実施し、比較したことで、各自の心の優しさにふれ、人の温かみを感じることができたものと思われる。なお､各自の目指す方向性（教師への道）に向け、自己意識を高めることと、これから目指す「善き教師」としての生き方と道徳的人間としての生き方について学び、伝えていこうとする姿勢を培うことができていたものと推認される。そして、本講義による会話形態により、意思の疎通が行われ､道徳性が高まりつつあることが明らかとなった。こうしたコミュニケーションについては、実際に児童生徒たちを目の当たりにした授業実践にも適応でき、学校教育活動全体として、道徳性を高めることが期待できる。しかし、大学の教員養成過程の役割として、さらなる学校現場での実体験に基づいた具体的かつ、実践的な講義内容を充実していく必要があることを指摘する。また、コミュニケーションを前提とした講義を充実させ、自己決定と自己実現、課題解決を高めることのできる教師を育成していくことが求められる。そして､さらに強い倫理観と道徳観を培い、児童生徒たちに｢真の学び｣を伝えるための教師教育として､今後もコミュニケーションの実践研究について研究を深めたい。

付　記

本稿は、作田澄泰が授業実践及び、全稿執筆を行い、坂本清美、中山芳一が校閲を加えた。

引用文献・註

1）文部科学省『教育職員に係る懲戒処分等の状況について』2009-2010
2）吉田尚史『昭和63年教育職員免許法改正における専門性向上政策と教師像について―大学における教員養成制度改正過程の単位数増加に関する議論を通して―』福岡女学院大学紀要 人間関係学部編17，pp.109-118，2016
3）井口あずさ『教員養成としての非言語コミュニケーションスキルの育成―絵本を用いた指導の効果―』比治山大学現代文化学部紀要18，pp.1-11，2011
4）大森史博『道徳性の発達と問いかけの可能性』岩手大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要14，pp.269-279，2015
5）文部科学省『小学校学習指導要領 平成27年3月一部改正』
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/__icsFiles/afieldfile/2015/03/26/1356250_1.pdf　最終閲覧日：2018.12.29
6）荒木紀幸(編)『モラルジレンマ資料と授業展開 小学校編』明治図書，1990

参考文献

(1) 増田ユリヤ『教育立国フィンランド流教師の育て方』岩波新書 2008
(2) 松井富美恵『特別支援教育に思う』福井大学「教師教育研究」7，pp.93-98，2014
(3) 中川美津恵『教員としての力量形成-高校での教育実践を振り返って-』福井大

学「教師教育研究」7，pp.83-92，2014
(4) 渡辺本爾『教師であること-何を学び,いかに実践したかを問うて-』福井大学「教師教育研究」7，pp.3-10，2014
(5) 金光靖樹『「心の教育」という概念のモジュール論的検討--感染する表象としての「道徳」の疫学』大阪教育大学紀要 第4部門 教育科学57(2)，pp.89-100，2009
(6) 安斎勇樹，青木翔子『ワークショップ実践者のファシリテーションにおける困難さの認識』日本教育工学会論文誌，2019
(7) 増田美奈『ケアの倫理によるコミュニケーション行為における「聴くこと」の捉え直し:学校における生活指導への示唆』富山大学人間発達科学部紀要 12(2)，pp.27-35，2018
(8) 増井眞樹『「特別の教科道徳」をどのように実践するかー「考える道徳」「議論する道徳」の具現化ー』奈良学園大学紀要7，pp.135-142，2017
(9) 中村克洋『〝説得〟コミュニケーションの研究: Self Persuasion『自主説得』の考察』広島経済大学創立五十周年記念論文集 上巻，pp.733-768，2017
(10)堂坂浩二，鈴木哲司他『コミュニケーション活性化を目的とした絵からの感情判断理由の生成』秋田県立大学ウェブジャーナルB（研究成果部門）5，pp.24-31，2018
(11)村端啓介『Instagram 上での「いいね！」に見られる日本人の褒め行為の様相に関する考察』四天王寺大学紀要(66)，pp.267-274，2018
(12)久松功周『高等学校外国語科における見方・考え方を働かせる指導の具体』広島大学附属中・高等学校中等教育研究紀要（64)，pp.81-87，2018
(13)金子美芽，道田泰司『言語活動の充実を位置づけた授業の考察:小学校国語科「書くこと」の領域における交流を通して』琉球大学大学院教育学研究科高度教職実践専攻（教職大学院）紀要（2)，pp.1-10，2018
(14)藤原一恵『「自分の言葉で語り合う」言葉のやりとりがある学習：単元学習「おとなって何？」シンポジウム』鳥取大学附属中学校研究紀要49，pp.29-32，2018
(15)藤井智章，佐藤浩一『伝え合う力を育む中学校国語科の学習指導：メタ認知の視点を取り入れた話し合い活動を通して』群馬大学教育実践研究(32)，pp.147-158，2015
(16)岡野由美子『知的障害のある児童生徒の教育課程と指導法について―新学習指導要領の改訂に視点を当てて―』奈良大学人間教育1(8)，pp.249-259，2018
(17)永山智之，小山智朗他『わが国の自閉スペクトラム症への心理療法的アプローチの現状分析:知的障害の有無・発達段階による差異』兵庫教育大学研究紀要：人間発達教育専攻 特別支援教育専攻 教育内容・方法開発専攻 教育実践高度化専攻 附属学校園 53，pp.21-25，2018
(18)田中真理，義村さや香他『〈特集〉『心の教育』を考える--発達障害の理解と対応-- （特集:第20回リカレント教育講座シンポジウム抄録)』京都大学大学院教育学研究科附属臨床教育実践研究センター紀要21，pp.3-33，2018
(19)高田久美子，大谷 哲弘他『認知行動療法および行動コンサルテーションにおける高等学校での特別支援教育の現状と課題』心理学研究:健康心理学専攻・臨床心

理学専攻8, pp.1-17, 2018
(20)井戸伸之, 左藤敦子『〈研究論文〉通級指導教室（難聴・言語障害）と特別支援学校（聴覚障害）における連携および協力の現状と課題』筑波大学別支援教育研究12, pp.73-81, 2018

Consideration of morality concerning "communication of the heart"
-Effects of Presentation Software in Teacher Training Course Effects of Morality on Conversation Students' Conversation Form -

Kiyomi SAKAMOTO*1, Kiyohiro SAKUDA*2, Yoshikazu NAKAYAMA*3

We examined the necessity of teacher training course which introduced problem of today's teacher and introduced communication with communication. In addition, we conducted four kinds of conversation forms for third graders (male: 10, female: 15), and communication that allowed us to perceive the most intuitive communication was inferred. In addition, for university students aiming for teaching jobs, it is clear that they carry out different communication using presentation software and carry out teaching as magical as a spirit by implementing them as their targeted teacher image in the future It was made. Based on the results of this research, this conversation pattern is expected to be related to the entire school education activities including classes including moral education, and to increase morality by communication. In addition, we clarified the way of teacher training course to cultivate future ethics and morals.

Keywords: aiming teacher image, communication, conversation form deepening morality, communication of intention, Ethics and morals

*1 Former Okayama University graduate school pedagogy postgraduate course technological assistance one
*2 Waseda University institute of teacher education
*3 Okayama University whole school education and student support organization

---